

故大澤一雄前学長追悼号刊行の辞

平成七年九月二日、横浜商科大学大澤一雄前学長が逝去されてから早くも一ケ年が経過した。この間、私は学長室に残された多くの書類の整理に当たる機会が与えられた。先生は、病と闘いながらも種々の会議の記録を簡潔かつ正確に書き残されとともに、大学の将来に必要なと思われる情報を幅広く収集され、体調を崩された後もそれを続けておられた。また発注された新刊図書が、亡くなられる直前までもなお次々に到着した。恐らく「朝二道ヲ聞カバ、夕ニ死ストモ可ナリ」という先達の心境にあられたと思われる。

そのような大澤先生であるから、本学が短期大学として発足したときも、また四年制の商科大学になった当初も、まだ学術的な雰囲気には乏しいことを案じられて、学術研究会の設立、商大論集の発刊、学内における研究発表会の開催をはじめ、次々に研究条件の改善に意を用いられ、さらに台湾の致理商業专科学校との姉妹校提携、中国の北京第二外国语学院との学術文化交流協定の締結、国内外留学制度の確立など、学術研究の中心人物として活躍された。本学が今日、異色の大学として社会から認められるようになったのは、大澤先生の日夜を分かたぬこのようなご尽力の賜物である。

大澤先生は、昭和二十年以来教壇に立たれ、昭和四十一年からは二十九年の長きにわたり、横浜商科大学の発展のために心血を注がれた。その間に学長代理並びに学長として九年も大学運営のために貢献され、何事についても大学のリーダーとしての見識に裏付けられた決断を示された。

また大澤先生は大いに酒を愛され、多くの教職員とともにしばしば杯を重ねて親交を深められ、ノマド的に分散移動して授業をしている私たちに、家族的な結束を生み出された。多年にわたり先生がパイオニア的研究を続けておられたベトナムとの交流がいよいよ本格化し、これから先生のご研究が結実する絶好の時機を迎えるというときに惜しくも急逝されたことは、まことに残念至極で、さぞかし先生も心残りであられたことと思う。

背筋を伸ばし貴公子然として静かに大学の廊下を歩む大澤先生の姿にもはや接することはできないが、卒業式や入学式における先生の格調高く教養に溢れた珠玉のスピーチは、教職員や卒業生の心に今なお強烈な印象を残している。横浜商科大学学術研究会では、このような大澤先生のお人柄と業績を偲びつつ、本学を愛しその発展のために多大の貢献をされた先生を記念して「故大澤一雄前学長追悼号」を刊行することを評議員の総意をもって決定した。先生の一年祭にあたり謹んで本号を墓前に捧げたい。

平成八年九月二日

横浜商科大学長

横浜商科大学学術研究会長

村田稔雄